

徳は薫る

薫香

生きているものにはいい香があり、死んだもの、腐ったものには悪臭がある。尊い徳、崇い人格には、尊い香、崇い薫がある。それに反して罪悪のある所、不徳の人格のある所、そこには、それに相応した悪臭がある。

大無量寿経に如来の本願、第三十二願、国土嚴飾願に説きて言く

「設ひ我佛を得んに、地より己上、虚空に至るまで、宮殿、樓觀、池流、華樹、国中所有の一切万物、皆無量雜宝、百千種香を以て而も共に合成し、嚴飾奇妙にして諸の人天に超え、その香普く十方世界に薫じ、菩薩聞く者皆仏行を修せん、若し是の如くならずば正覚を取らじ。」と。

浄土は如来の清浄功德に薫る世界である。したがって宮殿も、樓觀も、池の流れも、樹木も華も、全てのものは尊い馨においに薫り、それが十方世界に薫じゆく。菩薩という菩薩はこの香を聞くのである。この香を聞いた時、そこには仏の大道が修せられて来る、かくの如くならねば南無阿弥陀仏の正覚は成就出来ない、と誓われたのである。

念仏の行者のある所、仏の香がする。それは、誠にかくの如き仏の誓願によるのである。闘士の香によるのである。

自然の徳風

隠さんとしてかくし得ず、覆わんとしておおい得ぬものは、においである。

物のおいひは、あるいはこれを包みおおせるかも知れない。しかしながら、心より発するにおい、その行動より発するにおい、これを如何なるものを以ても、遂にかくし包むことが出来ないであろう。

今、にわかには悪臭を包み、芳香を発せんとするも、得べからず。人の尊き薫香に、自らの鼻をつまみ、強いて悪臭と言ひて毀損せんとするも、人はまず、かくの如く言う人の悪臭の強きを聞いているであろう。

薫香も自然であり、悪臭も自然である。一つは、如来の願力自然より発り、一つは、久遠劫来の無明悪業より発す。

尊き浄土の薫りは如何にして我らのものとなるのか。言く、まず高き香のする教を忠実に聞くことである。自ら尊き香を放たんとする前に、尊き薫香を聞け。しかして我が悪臭に気づけ。自ら清浄なるかかおりを発すると思う時、人より聞けば既に、高慢なる悪臭に鼻もちもならぬであろう。

世に癌という病がある。その末期に至れば、人を悩殺する底の悪臭を発する。心の自力我慢の癌もまた然りである。

如来真實の教は、誠に、この痺を切開抽出するメスであり、大手術である。

真実の教を聞くことなくして、一人の聖賢あることなく、人格あることなく、麗しき薫香あることは出来ない。

徳自然のかおりは、その座にかおり、屋根にかおり、柱にかおり、礎石にまでかおる。唯に一世にとゞまらず、時に幾百千年に及ぶ。この香、歴史を成就するに至つてついに国土の自然の香となる。

念仏の梅檀香は

津山女子高等技芸学校にある日、警察の方がお見えになつて、調べて頂きたいことがあると申された。それは同校の一生徒が、次のような手紙と共に、匿名で金一封を警察に送つたからである。

日本否全世界に迄印象づけし昭和十二年も終り、昭和十三年度の新春を迎へましてお目出度う御座います。美しい初日の出を拝しつとお雑煮を祝ふことの出来ました私達は何という幸福者でしょう。此の寒空に、北支に或いは南支にと活躍される皇軍の将兵の方々の御身の上を思う時、ひとり合掌の姿となります。何でも零下幾十度とかの、その酷寒と戦ひつつ、み國の為、九千万同胞の為に、いや東洋永遠の平和確立の為に、我が身を捨て、草木も凍る雪の曠野で、あらゆる辛酸をなめられつつ御奮闘を續けていられます皇軍の皆々様のことを考えます時、私達は少しも安閑としてはゐられません。と云つて直接社会に乗出して働くことも出来ませず、唯自分の務を全うするより他ないと思ひます。私の兄も光榮なことには帝国軍人の一員として雪の曠野で活躍して居りますが、残念なことには未だ一つこれぞと思ふ武勲を立てゝいません。幾ら特務兵でも、立派な働きが出来ないことは無いと思ひますが……唯家内一同立派に御国の為に盡してくれればと唯そのみ心配致して居ります。

学校では校長先生より一週間に一時間、我身を射す様な尊い厳肅な訓示を承り、学生一同堅く決心して諸先生方と共に、皇軍の方に感謝し銃後の務を堅く誓ふのであります。そして日々を後悔なき様有効に過すことに努力致して居りますが、と言つて軍人の妹として銃後の務を果さなければならぬ私は、今だ少しもお役に立つ様な事をしていないことを大変痛感するのであります。それで学期の終りに堅く決心して、小遣錢、裁縫で戴く僅かの金や、間食をさいて貯へたのです。平素は親より戴くのみで余金を持たぬ私は、皇軍将兵の方々のことを考えて徹夜したこともあります。そして休暇を利用して集めたのです。本当に僅かな金であります。純粋な私の汗の結晶であります故、暖い物も食べられず、飢と寒さに苦しみ乍ら、私達の為にお働き下さる皇軍の皆々様の慰問資金の一端なりと役立てて下さいませ。僅ですが唯学生としての私の志のみです、どうぞ役立たせて下さいませ。お願ひです。今後は尚一層校長先生を始め、諸先生方の教訓をよく守り、大和撫子として強き身体と精神とを鍛へ、銃後の務を堅くして皇軍の方々の武運長久を祈り、東亜永遠の平和を確立して、一日も早く凱旋あらんことを祈るのみであります。

一月八日

誠に心幽しき純情ではある。学校より放った有難い薫である。警察の方が感心されたのは、普通なれば、少しでも兄のはたらきを言いたいところを、かえって謙遜して何等の手柄を立て、いないといい、手紙もまた匿名になっていることであつた。こうした銃後の至誠は、全函にみなぎっている。であるが故に、我が国は強いのである。

私は同校において、先生方を中心に正信偈講座を開演している。そして学校に行つた都度、全校の生徒に一席の講話をさせられている。水を打つたように静に、中には涙さえ浮べ、合掌さえして聞入っている。校長その他の胸に燃える念仏の梅檀香は、必ず生徒の上に何等かの香となつて出ずにはおかない。

毛孔のかおり

春の谷間の薫、秋の山の香、春もかおり、秋もかおる。しかし春がかおるといつても、谷間の枝頭の梅花のかおりであり、秋の香りといつても、土を割つて出る茸の香りである。

如来浄土の梅檀香も亦、唯漫然たる話ではなくして、必ず人の上にかおる。

維摩経に於ては、あの世の香飯は、これを頂いた菩薩たちの毛孔より薫つた。信心は内に成就して、その幽しきかおりは、念仏行者の毛孔より出でる。身の毛孔より発するにおいのみが、真にその人のものである。

されば、大法は全身を耳にして聞くべきであり、全身を手となし、全身を口にして行すべきである。耳、大法を聞くに似、口、念仏するに似、手、合掌するに似て、それが全身の事実にならぬは、全我の上に大信成就せぬためである。真実の大信心は必ず、顔の一一の毛孔細胞の事実となる。

国土のかおり

如来の国土には梅檀樹有りと言われ、その香を説いて「香氣普薫」という。この国土の香氣こそ、浄土の菩薩をして不退転に仏道を成就せしめるものである。されば大経には、

「微風徐く動きて請の枝葉を吹くに、無量の妙法音声を演出す。その声流布して諸の仏國に徧す。其の音を聞く者は深法忍を得、不退転に住す。仏道を成ずるに至るまで、耳根清徹にして苦患に遭わず。目にその色を見、耳にその音を聞き、鼻にその香を知り、舌にその味をなめ、身にその光を触れ、心に法を以て縁ずるに、一切皆甚深法忍を得、不退転に住す。」

と説かれる。

自ら光を発し、自ら香を放ち、自ら色を清くせんとする者は、聖道門である。

国土の光に、国土の色に、国土の香に生かされ、光をその身に受け、目にその色を見、耳にその音を聞き、しかして鼻にその香をかいで生かされるものは、浄土門であ

る。しかしてそれによつて菩薩の上に成就するものは法忍である。されば、浄土の国徳をおいて、菩薩の徳はあり得ないのである。

日本国民は、日本国土自然の凶徳に生かされる。国土の光をその身に解れ、国土の色をその限に仰ぎ、国土の声をその耳に聞き、国土の香気をその鼻にかぐ。そこに無我に、己を忘れ、小我を超え、国土に摂取されて生かされるのである。日本国土の光を、声を、香を知らずして、外国のそれに生きんとする者は、国民ではあり得ない。

日本国土は、浄土の国徳の生きたまう国土である。浄土は大乗善根界である。大乗の善根は、日本国の大乗善根となつて、日本国土をして、その本来の香気を発せしめた。

国土の薫香というも、畢竟、徳の薫りである。国土の香気は、国民の全身に、その毛孔にかおる。しかも国民は、国土の香気を知つて己の悪臭を懺悔す。

唯香気を聞くべき鼻を持たざる者は困つたものである。この鼻を成就するものは、唯、眞実なる教である。